

登場人物

前シテ	女	深井（近江女・靈女）・無紅
後ジテ	山姥	唐織
ツレ	百ま山姥	山姥・無紅厚板壺折・半切
ワキ	都の男	小面・唐織
ワキ連	随行之男	素袍上下
アイ	所の男	素袍上下
		長上下

構成と梗概

- 1 ツレ・ワキの登場 都の男（ワキ）が随行之男（ワキ連）と共に、都で評判の女曲舞の百ま山姥（ツレ）の供をして善光寺参詣のため北陸路にかかり、境川に到る。
- 2 ワキ・アイ・ツレの応対 男は所の者（アイ）に道を尋ね、案内を頼む。
- 3 アイ・ワキ・シテの応対 俄かに日が暮れ困惑のところに、女（シテ）が現われ、宿を申し出る。庵へ案内した女は百ま山姥に曲舞を所望する。
- 4 シテの中入り 女は真の山姥であると素姓を明かし、歌いはじめた百ま山姥を制して、夜中の再会と、本性を現わしての移り舞を約して消える。
- 5 アイの物語り 所の男は、山姥の素姓につき諸説を語る。
- 6 ツレ・ワキの待受け 笛を調べて山姥の出現を待つ。
- 7 後ジテの登場 山姥（後ジテ）が現われ、深山幽谷も万箇目前の境界たることを詠嘆。

- 8 ツレ・シテの応対 山姥の怪異な容貌。
- 9 シテの前奏歌 山姥は百ま山姥に歌を催促し、曲舞がはじまる。
- 10 シテの語り舞 山姥の境涯を語る曲舞につれて、山姥も舞う。
- 11 シテの立働 き 山姥の山めぐり。
- 12 シテの立働 き、結末 山姥の輪廻妄執を見せて、山中に消え去る。

備考

*五番目物。太鼓なし。

*観世・宝生・金春・金剛・喜多の五流にある。

*底本役指定は、シテ・後シテ、ツレ、ワキ、同、地。

一「有難い弥陀の光明による極楽へのお導きを頼りにして信濃の善光寺へお詣りしよう」。「善き光ぞと仰ぐなりや」(《柏崎》)等、善光寺の名に言いかけた。

二古写本に「かやうに候ふ者は」とも。

三下掛りの「おん方」に同じ。人への敬称。

四底本「ひやくま山姥」。「百ま」(百魔・百万とも)

は実在の女曲舞百万(《百万》参照)の名を借りたらしく、ここは、「山姥の曲舞」で一世を

1

風靡した百万、という意の仇名(注七参照)。「山姥」は山に住むと信じられた異形の女。解題参照。

五下掛りに「都に隠れもしまさぬ百魔山姥と申す遊君にてござ候」(《遊音抄》による)。「遊君」、「遊女」

(観世)は歌舞に携わる女性。ここは女曲舞。

六白拍子の流れを引く中世歌舞芸の一。解題参照。

七下掛りに「京童の付け申したる異名にてわたり候」(《遊音抄》)という。

八下掛りに「当年は御親の十三年に当らせ給ひ候ふほどに 善光寺へ」と、その理由を説明する。

九底本指定なし。ワキ・ワキ連か。

一〇志賀の枕詞。観世はササナミ。歌枕「志賀の浦」に「浦舟」を続け、以下、琵琶湖を舟行、陸路北陸道にかかる。「舟トアラバ」こがるる」(《連珠合璧集》)。

一一「愛発山」(越前)は近江との境の山。中世歌枕。

一二「玉江の蘆」の転訛か、変型か。「夏刈りの玉江の蘆といへるは越前のよし」三嶋江の玉江とは別所也」(《八雲御抄》)。「浅水橋」(麻生津)なら中世歌枕。

山 姥

【次第】でツレを先立ててワキとワキ連が登場 正面先に立つ

〔次第〕 向き合つて
ワキ連 善き光ぞと影頼む 善き光ぞと影頼む 仏の御寺尋

ねん

〔名ノリ〕 正面へ向き
ワキ「これは都方に住まひ仕る者にて候 またこれにわた

り候ふおんことは 百ま山姥とて隠れなき遊女にてござ候 かやう

におん名を申す謂はれば 山姥の山廻りするといふことを曲舞に作

つておん歌ひあるにより 京童の申し慣らはして候 また善光寺へ

参りたきよし承り候ふほどに それがしおん供申し只今信濃の国へ

と急ぎ候

〔サシ〕 ワキ へ都を出でてさざ波や 志賀の浦舟がれ行く 末はあ

らちの山越えて 袖に露散るたまえの橋 かけて末ある越路の旅

一 底本指定なし。現行に従う。

二 梢のそよぐ様を波に見立てた和歌表現。「潮越」は越前と加賀の境の岬の名。『廻国雜記』に「汐こしの松」を尋ねたことが見える。

三 加賀（現石川県小松市）の地名（『安宅』参照）。

『義経記』七に「根上りの松」のことが見える。

四 「煙トアラバ、夕煙…松」（『連珠合璧集』）。

五 「利剣即是弥陀号、一声称念佛皆除」（善導『般舟讚』）。「剣」に「仏の原の金剣明神」（『源平盛衰記』、現鶴来町）をこめるか。堯恵『善光寺紀行』にも。

六 へ山は雲を湧き立たせ、その雲中の山路をせき立て通る身は、越前・越中・越後へと通ずる三越路を行く、その越中の国の果ての里の名を問うと。

七 越中と越後の国境の川。

八 これから進むべき道の様子や事情。

九 ワキは「これより善光寺への道あまたある

2

よしを承り候 在所の者に尋ねて参らうずるに
て候」という（妙庵本補訂本文。下掛りは「…道の二つあるよし」）。

二〇 ワキの報告は「在所の者に尋ねて候へば 上路越と申すは如来の御通りありたる道にて候 これが本道にて候ふが ただし御乗物は叶はぬよし申し候 なにと御沙汰候ふべき」という（妙庵本による）。上路越にこのような伝承があるか、未詳。

二一 西方極楽浄土は十万億土の遠くにあり、それに比べれば上路越は悪路とはいえ善光寺へまっすぐに向

思ひやるこそ遙かなれ

「上ヶ歌」^{向き合つて一}ワキ連^{ワキ}、梢波立^{コズエ}つしほこしの^{（潮・潮越）}梢波立^{ナミダ}つ潮越^{シオコシ}の^三安宅^{アタカ}の松

の夕煙^{イウケムリ} 消えぬ憂^ウき身の罪^{ツミ}を斬^キる 弥陀^{ミダ}のつるぎのとなみやま^{（利・礪波山）}

雲路促^{クモジウナガ}すみこしぢの^{（身・三越路）}国^{スエ}の末なる里問^{サトト}へば いとど都は遠ざかる

さかひがはにも着きにけり^{（境・境川）} 境川^{サカイガワ}にも着きにけり

「着キゼリフ」^{正面へ向き}ワキ「おん急ぎ候ふほどに^{ニン} 越後越中の境川^{エチゴ エツチウ}におん着

きにて候^{シバラ} 暫くこれにござ候ひて^{ワキは一行をうながしツレとワキ連は脇座に着座} なほなほ道の様体をおん尋ねあ

らうずるにて候

「問答」^九ワキは在所の者に道を尋ねようと言ひ常座に立つてアイを呼出す^{アイは狂言座に立つて上路越を教える}ワキは真中に戻つて坐りツレにその旨を報告する

「問答」^{着座のまま}ツレ「げにや常に承る^{ツネ} 西方^{サイホオ}の浄土^{ジョウド}は十万億土とかや^{ジウマンノクド} これ

はまた弥陀来迎^{ミダライコウ}の直路^{チヨクロ}なれば^二上路^{アゲロ}の山^{ヤマ}とやらんに参り候ふべし

（へ）^三とても修行^{シュギョウ}の旅^{タビ}なれば^乗り物をばこれに留め置き^{トド} 徒歩^{カチ}跣足^{ハダシ}

にて参り候ふべし^{ワキへ} 道^{ミチ}しるべしてたび候へ

「問答」^{ワキは再びアイを呼び道案内を頼みアイは承知する}ワキはツレに報告し、同立つ^{アイは山道を案内の体でワキに話しかけるがやがて日が暮れかけることに気付く}

い、弥陀に迎えられる本道だ、の意。「直路」は「まっすぐな道」(『日葡辞書』)。

3

三 越後路の難所親不知(市振から青海までの海辺の道)の背後が上路山。その山を越えて橋立より青海へ出る道筋が上路越らしい。

三へともと廻国巡礼の信仰上の旅だから。

四へ暮れるはずもない日中なのに…。怪異の前兆。

五へさてどうしたらよからうか。困惑の気持。

六下掛りは「お宿参らせ候はん」。

七下掛りは「これは初めて善光寺へ参る者にて候ふが俄かに日の暮れて前後を忘れて候ふに 嬉しくも承り候ふものかな お宿借り申さうするにて候」。

八へ途方にくれています。

九自分には格別のわけがあるからだ、の意。都で評判の山姥の曲舞を直接聞きたいというのがその理由。

二〇へ年来思い続けて来た希望なのです、それが果せたら田舎暮らしの身にとっての忘れられぬ思い出となるでしょう。…ぜひとも歌って下さい。「聞かせ給へ、…望みなり、…思ふべし」等と、短い文をつないで、好機にめぐり合った切なる気持を吐露。

二一へわれわれ一行を何者とお思ひになつて…。何か勘違いではないか、との探りの応答。

二三へなんでお隠しなさるか。下掛りは以下「あれにましますは百魔山姥にてはましますさずや」。

三三 曲舞の冒頭部(三六四頁二行目)。「曲舞は次第にて舞初めて、次第にて止むるなり」(『申楽談儀』)。

山 姥

〔問答〕 ワキ「あら不思議や暮れまじき日にて候ふが俄かに暮れて候ふよ」

一五 さてなにと仕り候ふべき ワキは宿がないかと尋ね
アイは泊る所はないと答える

〔問答〕 シテへ「のうのう旅人お宿参らせうのう」 アイは「やお宿参らせうと申
し候」と言つて狂言座へ退く

幕から姿を見せ タビヒト一六ヤド シテ「これは上路の山とて人里遠き所なり 日の暮れて候へばわらはが庵にて一夜を明かさせ給ひ候へ」 立ったまま一七

の暮れ前後を忘れて候 やがて参らうするにて候 シテは舞台に入り真中に
着座ツレヤワキも着座

〔問答〕 シテへ「今宵のお宿参らすること」とりわき思ふ子細あり」 一九

山姥の歌の一節歌ひて聞かせ給へ 年月の望みなり 鄙の思ひ出 二〇

と思ふべし 正面へ向き (へ) のためにこそ日を暮らし おん宿をも参らせて候へ ツレへ

ことを承り候ふものかな さてたれと見申されて山姥の歌の一節と 二二

は御所望候ふぞ ゴシヨモオ シテ「いやなにをか包み給ふらん あれにまし ツツ

ますおんことは 百ま山姥とて隠れなき遊女にてはましますさずや ヒヤク ヤマンバ カク イウジヨ

まづこの歌の次第とやらんに (へ) よしあしびきの山姥が 山廻り ニ二三 正面へ向き(善)(悪・足引)

「一百ま山姥という名前は、の意。下掛りは「このおん名は」。上掛り古写本は両型。

二「へ山に住む女を山姥というのなら、私の境遇と同じではありませんか（私もまた山姥だ）。

三「へここ何年もずっと謡い続けていらつしやる山姥の曲舞の、歌の言葉に山姥のことは何度口にしなから、山姥そのものには少しも思いやって下さらぬことの恨み言を申しに現われたのです」。

四「曲舞道の奥義を極め、名人上手の名声を得て、この世の福德栄光を一身に集めることが出来たのも、すべてこの山姥の曲舞の一曲のためではないか」。「世上万徳の妙花」は『風姿花伝』奥義にも見える語で、底本の「世情」（『謡抄』の宛字）を訂正。

五「舞歌音楽の妙音の声」（ここでは曲舞を歌うこと）が弔問の仏事となる、の意で、「狂言綺語の戯れが讃仏乗の因」（三六六頁注四参照）をふまえていう。

六「声為三仏事」は経疏等に見える慣用句。

七山姥の身を受けるのも六道輪廻のためだが、仏事弔問によつて帰性（真如の実性に帰すること、悟り）を得て輪廻を脱し、鬼性（ここは鬼女との掛詞か、但し『笠卒都婆』の同例からは鬼性らしい）の身も善所（極楽）に赴くことが出来る筈だ、の意。曲舞聴聞の懇請は、ここに到つて仏事弔問の意と知れる。

八山姥が恨みの声をあげ、鳥獣も同調する。 4

九「幽霊これまで来たりたり」（『松風』）など

の類型表現に基づき、「霊鬼」は山姥を幽霊的に扱う。

すると作られたり あら面白や候（ソオロオ） 「これは曲舞によりての異名（イミヨオ）
ワキヘマコト
さて真の山姥をばいかなる者とか知ろしめされて候ふぞ

「山姥とは山に住む鬼女（キジヨ）とこそ曲舞（クセマイ）にも見えて候へ（シテ）「鬼女と

は女の鬼（オシナオニ）とや よし鬼なりとも人（ヒト）なりとも 山（ニ）に住む女ならば わ

らはが身（ミ）の上（ウエ）にてはさむらはずや へ年来色（トシゴロイロ）には出ださせ給ふ 言（コト）

の葉草（ハグサ）の露（つゆ）ほども おん心には掛け給はぬ 「恨み申しに来たりた

り（イツキヨク） へ道を極め名を立てて 世上万徳（セジヨオバントク）の妙花（ミヨオカ）を開くこと この一曲

のゆゑならずや しからばわらはが身をも弔（トム）らひ 舞歌音楽（ブガオウガク）の妙音（ミヨオン）

の 声仏事（コエフツジ）をもなし給はば などかわらはも輪廻（リンネ）を逃がれ きしや

（性）の善所（ゼンショ）に至らざらんと

「下ゲ歌」（言・ウタ山）（ハ） 鳥獣（トリケダモノ）も鳴き添（ソ）へて 声（コエ）（揚・上路）をあげろ

（山・ン山姥）（山・ン山姥）のやまうばが 霊鬼（レイキ）これまで来たりたり

「掛け合」（シテヘ）不思議のことを聞くものかな さては真（マコト）の山姥の

これまで来たり給へるか シテ「われ国々（クニグニ）の山廻り（ヤマメグ） 今日（キヨオ）しもここ

一〇 鬼性と共に、山廻り（山々を駆け廻ること）を山姥の属性としている。

一一 山姥が諸法実相を体现することや、人間にとっての有用性。クセ中に示される。

一二 へとかく言つて辞退したら恐ろしいことになる、ひよつとしたら危害に及ぶかも知れない。

一三 へおすおすとの時の調子（季節や時刻にかなった音の高さ。楽理で定められている）に基づいて、リズムを取りつつ謡い始めると。「拍子を進む」は足拍子を踏んで舞う曲舞や白拍子についていう。

一四 暫くお待ちなさい、どうせのことなら。

一五 夜声は「ささめくしもぞかしがましき」（『源氏物語』浮舟）というイメージがある。人跡絶えた上路の山中の夜の静寂を揺るがす月下の詠吟。

一六 へそれ、もう夕月も輝きはじめて来た。

一七 へただでさえすぐに暮れる深山では、暮れるのと先を争うように雲がかかる、その雲が月を隠さぬよう祈りつつ、一所懸命に夜通し歌って下されば。「暮るるを急ぐ月の名の」（『姨捨』）と同じ用法。「雲トアラバ……山……かゝる」（『連珠合璧集』）。

一八 「あらはし衣」は喪服が原義だが、謡曲例（『右近』）は現わす意で、袖の序とする文飾語。

「袖継ぎて」はあとからつけて舞う意。

一九 その舞態をまねて舞う意（『阿古屋松』）

「筒」の例も同様。なお『楊貴妃』の例（四二三頁注七参照）はこれらを承けた文飾語（『賀茂物狂』も）。

山 姥

に來たることは わが名の徳を聞かんためなり 歌ひ給ひてさりと

ては わが妄執を晴らし給へ ツレへこの上はとかく辞しなば恐

ろしや もし身のためや悪しかりなんと 憚りながら時の調子を

取るや拍子を進むれば シテ「しばさせ給へとともさらば 暮る

るを待ちて月のよごゑに 歌ひ給はばわれもまた 真の姿を現はす

べし へすはやかげろふ夕月の

「上ゲ歌」 シテいさなきだに 暮るるを急ぐ深山辺の 地へ暮るる

を急ぐ深山辺の 雲に心を掛け添へて この山姥が一節を 夜すが

ら歌ひ給はば その時わが姿をも あらはし衣の袖継ぎて 移り舞

を舞ふべしと 言ふかと見ればそのまま かき消すやうに失せにけ

り かき消すやうに失せにけり

「問答・語り」 アイが常座に出て日が暮れたかと思うとすぐ夜が明ける山の不思議を述べ

「□」 ツレへあまりのこの不思議さに さらに真と思ほえぬ 鬼女

が言葉を違へじと

一 松風の音に添えて笛吹く音が冴え、合わせて歌う曲舞の聲が月夜の山川に澄みわたる。

二 二六〇頁注六参照。

三 前世の悪業により鬼となつてわれとわが死屍を鞭打ち、前世の善行により天人となつてわが死屍に散花するといふ説話(『天尊説阿育王譬喻經』等)により、

「溫野に骨を礼せし天人は平生の善を喜び、寒林に髓を打ちし靈鬼は前世の惡を悲しむ」(『平治物語』)とも。唱導の文に基づくか。「寒林」は林葬の墓所。底本の「林野」は『謡抄』の宛字。古写本は「ぢんや」(「塵野」とも)。「深野」(現行)は存疑。

四 「きしやう」は底本「幾生」(『謡抄』による)。

五 悟つてみれば善惡・邪正も、一つの真理の違つた現れにすぎぬ、の意。「經ニ云ハク、善惡不二・邪正一如トアリ」(『花伝・別紙口伝』)。

六 一切の真理は万象を目前に見る人の心にある、の意。その意をもつて以下に眼前の山河の形状を叙す。

七 見下ろせば急流ははてしなくつらなり、見上げれば巖壁は峻しく聳え立って、順逆不二の理を示す。

八 青苔の巖の造形はどんな名工、碧色の淵はどんな染色家によるのか。「山復山、何工削成、青巖之形、水復水、誰家染出、碧潭之色」(『和漢朗詠集』山水)。

九 月の光もささめ鬱蒼とした山陰より。

一〇 へはやもう口に出されたお言葉の通りで、私の様子からでもお分りでしょう。「穗に出で」は、ちら

〔上ゲ歌〕 着座のままマツカセトモ 松風共に吹く笛の 声澄みわ

たる谷川に 手まづ遮る曲水の つきに声澄む深山かな 月に声澄

む深山かな

【一声】で鹿背杖を突きつつ後ジテが登場 一ノ松に立つ

正面へ向き 〔□〕 シテ へあら物凄の深谷やな あら物凄の深谷やな

〔サシ〕 シテ へ寒林に骨を打つ 靈鬼泣く泣く前生の業を恨む 林野

に花を供ずる天人 返すがへすもきしやらの善を喜ぶ いや善惡不

二 なにをか恨みなにをか喜ばんや 「万箇目前の境界 懸河渺々

として へ巖峨々たり

〔クリ〕 シテ へ山また山 いづれの工か青巖の形を削りなせる 水

また水 たれが家にか碧潭の色を染め出だせる

〔掛け合〕 着座のままシテ へ 恐ろしや月も木深き山陰より その様化したる顔は

せは その山姥にてましますか シテ へ とてもはや穂に出で初め

し言の葉の 気色にも知ろしめさるべし われにな恐れ給ひそと

と口をついて出た言葉(「その様化したる…」)をいう。
二「へこうなつた以上は、恐ろしいけれども山姥の言う通りにしよう」と、夜の暗闇から現れたその様子を見ると。「鳥羽玉の」は「暗(黒)」の枕詞。夜の意。

三「髪はおどろ(雑草・イバラ)のように乱れて雪のように白く」。「おどろの髪」は乱れた髪形容の意。

三「顔面は真赤、丹や朱の「さ丹塗り」の家の軒の鬼瓦そっくりの形」。鬼瓦は醜悪な女の顔の髷え。

四「なにに髷へん」は髷えようもない心という歌語。

五昔のあの鬼一口の恐ろしさ、今わが身のことになつて、『伊勢物語』同様に世に伝えられることになつたら、辛く恥ずかしい、の意。「鬼一口」「雨の夜」

「神鳴り騒ぐ」「白玉かなにぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを」等、『伊勢物語』六段による。

一六「春の夜の一刻が千金に替え難いのは花の香とおぼる月、私にとっては一期一会の曲舞の一曲」。一九八頁注九参照。花・月・雪を並列。「願ひの玉」は「念ひの珠」の変型か。

一七「折しも素晴らしい夜に」。あたらしい夜は歌語。

一八「辞退せぬ意、筆舌に尽せぬ山中の意をかける」。

一九「一声山鳥曙雲外」(『和漢朗詠集』郭公)。「一とゑ」は郭公の属性。その羽ばたきを「一声を上げる」(歌謡を歌い出す意)ことに言いかけた。

二〇「鼓トアラバ…滝」(『連珠合璧集』)。

二一回雪は舞の形容。「雪トアラバ…花、梅」(同右)。「このはな」は梅花、一八頁注二参照。

よ ツレへこの上は恐ろしながらうばたまの 暗紛れより現はれ
出づる 姿言葉は人なれども
ツレへ眼の光は星のごとし
ツレへさて面の色は
ツレへさ丹塗り

の ツレへ今宵始めて見ることを
ツレへ軒の瓦の鬼の形を
ツレへ今宵始めて見ることを

「上ゲ歌」地へ鬼一口の雨の夜に 鬼一口の雨の夜に 神鳴り騒ぎ恐
ろしき その夜を思ひしらたまか なにぞと問ひし人までも
わ

が身の上になりぬべき 憂き世語りも恥づかしや 憂き世語りも恥
づかしや

「掛け合」シテ「春の夜の一刻を千金に替へじとは 花に清香月に
陰 これは願ひのたまさかに ゆき逢ふ人の一曲の その程もあた

ら夜に はやはや歌ひおはしませ ツレへげにこの上はともかく
も 言ふに及ばぬ山中に シテ「一声の山鳥羽を叩く ツレへ鼓

は滝波 左袖を見やり シロタエ ツレへ雪を廻らすこのはなの
ツレへ

一二〇頁注五参照。「遊び戯れ」を山廻りに転換。

二へまよこの山姥が、善悪不二ならぬまよ、足を曳きずつての妄執の山廻りの苦しきよ。曲舞の始り。

三「高き山も麓の塵泥よりなりて、天雲たなびくまで生ひ上れるごとくに」(『古今集』仮名序)をふまえ、「泰山不_レ讓_二土壤_一、故能成_二其高_一」(『河海不_レ厭_二細流_一』)、「和漢朗詠集」(山水)等の変型。下句は

「波濤万頃」「万水一露」などの成句によるか。 10

四へ深く広がる人氣のない谷で梢に響く山彦、嬉しくも無声音悟りにより聞き得る無声音の音声(を聞く…)。「空谷遶音」(『莊子』)、「空谷伝声」(『千字文』)等。

五「人於深山中大呼音響四聞耳不知所在」を願った(『仏説七女経』。悟りの境地の譬喩)のもこんな所のことか、の意。深谷が悟得境に類えられている。

六「前海水瀼々月浮真如之光、後巖松禁々風奏常樂之響、聖衆来迎之義有_レ便、九品往生之望可_レ足と、又刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不_レ驚とも書れたり」(『源平盛衰記』十。延慶本『平家物語』にも)。

七ここは永遠に楽しみがあるとの誤解(四顛倒)の迷夢を風が吹き破る意で、『高野物語』にも。

八四三六頁注九参照。ここは蒲・螢・苔・鳥の叙景。九『古今集』春上の歌(末句「呼子鳥かな」)。

一〇「春山無_レ伴独相求、伐木丁々山更幽」(杜甫)。

二法性(真如)を峰、無明(暗愚)を谷に対比。上求菩提(菩薩が悟りを求める向土心。自利)、下化衆生(衆生を教化済度する慈悲心。利他)と対。

難波のことか ツレへ法ならぬ

「次第」地へよしあしびきの山姥が よしあしびきの山姥が 山廻り

するぞ苦しき 杖を扇に持ちかえる

「クリ」シテへそれ山といつば塵泥より起こつて 天雲掛かる千疊の

峰 地へ海は苔の露より滴りて 波濤を畳む万水たり

「サシ」シテへ一洞空しき谷の声 梢に響く山彦の 地へ無声音を

聞く便りとなり 声に響かぬ谷もがなと 望みしもげにかくやら

ん シテへ殊にわが住む山家の気色 山高うして海近く 谷深う

して水遠し 地へ前には海水瀼々として月真如の光を掲げ 後に

は嶺松巍々として風常樂の夢を破る シテへ刑鞭蒲朽ちて螢空し

く去る 地へ諫鼓苔深うして 鳥驚かずとも言つつべし

「クセ」地へ遠近の たづきも知らぬ山中に おぼつかなくもよぶこ

鳥の 声凄き折々に 伐木丁々として 山さらに幽かなり 法性

峰聳えては 上求菩提を現はし 無明谷深きよそほひは 下化衆生

三 仏教の宇宙観の金輪（山河大地の基盤）の最下端。
三 出自不詳・三界不定は出家居士の類型。その応用。
四 行雲流水・山林抖擻の出家修行をふまえた表現。
こは雲や水と一つになつて、の意。

五 へ人間に対面のため、雲のように自在なわが身を
変身して。「雲トアラバ……へだつる」（『連珠合璧集』）。
六 妄執の一念に凝り固まつた變化化生の鬼女の姿
で、今日の前に出現したるが。『本来無一物』の身。

七 「色不異空、空不異色、色則是空、空則是色」
（『般若心経』）。以下、煩惱即菩提や「三界唯一心、心
外無別法、心仏及衆生、是二無差別」（『自行略記』）
等の中世流布の理解をふまへつつ、そのような差別も
「柳は緑、花は紅」（諸法実相）を示すのだ、という意。

八 九四頁注一〇参照。

九 「薪負へる山人の花の蔭に休めるがごとし」（『古
今集』仮名序）。《志賀》参照。

一〇 「棚機なだたの五百機立てて織る布の……」（『万葉集』）。

二 「青柳をかた糸によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花
笠」（『古今集』神遊歌）、「鶯トアラバ……花の宿」。

三 「目に見えぬ鬼神をも……」（『古今集』仮名序）。

三 「空蟬トアラバ、唐衣」（『連珠合璧集』）。「空しき
世、身をかへてける源」（同上）の意で「袖」の序。

四 へ袖の霜の白さが月光の白い輝きと一つになり。

五 砧を打ちやむ間にも、山姥が代つて打つ意。「八
月九月正長夜、千声万声無了時」（『和漢朗詠集』擣
衣、白楽天）。「シデウツ……何回も頻繁に打つ、詩歌語」。

山 姥

を表して 金輪際ヒヨオ 足拍子に及べり 生所ニニも知らず宿も
足拍子ヒヨオ 以下クモミズ 定型の舞のうちに 到らぬ山ニニの奥もなし 生所ニニも知らず宿も

ば人間ニンゲンにあらずとて 地へ隔ヘダつる雲の身を変へ 仮カリに自性ジシヨオを變化ヘンゲ
して 一念イチネン化生ケシヨオの鬼女キジヨとなつて 目前モクゼンに來たれども 邪正ジャシヨオ一如イチニヨと

見る時は 色則シキソクゼ是空クウそのまゝに 仏法ブツポオあれば世法セホオあり 煩惱ボンノオあれば
菩提ボダイあり 仏ホトケあれば衆生シニジヨオあり 衆生シニジヨオあれば山姥ヤマカッもあり 柳ヤナギは緑 花

は紅クレナイの色々イロイロ 数拍子数拍子 さて人間ニンゲンに遊ぶこと ある時は山賤ヤマカッの 樵路シヨオロに通ふ
花の蔭花の蔭 休ヤスむ重荷オモヘに肩カタを貸し 月イもろともに山イを出で 里カヨまで送る

折ニニもあり またある時は織姫オリヒメの 五百機イハタ立つる窓ノリ込拍子に入つて 枝エダの鶯鶯
糸繰イトクり 紡績ホオセキの宿ヤドに身を置き 人を助くる業ワザをのみ しづのめに見

えぬ 鬼とや人の言ふらん 正面正面に向い 世シテをうつけみのからころも
地へ払ハラはぬ袖二四に置く霜シモは 夜寒ヨサムの月に埋ウズもれ 打ちすさむ人の絶え

間マにも 千声万声センセイバンセイの 砧セシに声声のしで打ツレつは 山姥山姥が業ワザなれや
常座常座でツレへ扇イタ指し 世語セゴりにせさせ給へと 思ふはなほも妄執モウシツか ただら

都に帰モトりて 世語セゴりにせさせ給へと 思ふはなほも妄執モウシツか ただら

一へただもう、妄執も善悪も、万事を放擲せよ。とは言えなお善悪不二を悟り得ぬ心を引きずっている山姥の山廻りの苦しさよ。

二三四頁注四参照。

11

三へましてわが名を歌う百ま山姥とは、深い因縁があつてのこと。

四へ山姥の憂き世の輪廻を示す山廻りを歌う曲舞の一節も、その歌舞がとりもなおさず仏法の讃嘆帰依の因縁となるのですよ。「願以今生世俗文字之業狂言綺語之誤、翻為当来世々讚仏乗之因転法輪之縁」(『和漢朗詠集』仏事、白楽天)に基づく。歌舞芸能(ここでは曲舞)も狂言綺語のうちと考えられていた。三六〇頁注五参照。

12

五「暇申して帰るとて」(《関寺小町》、「…帰る波の」(《松風》、「…帰る山の」(《当麻》、「…さらばとて」(《通盛》)等、類型表現。

六春一梢にさく花、秋一さやけき月影、冬一さえ行く時雨の…雪と、雪月花に寄せる山廻り。

七「雲トアラバ…雪氣」(『連珠合璧集』)。

八煩惱や妄執を雲に譬えることは定型。真如の月を隠す意。「離れぬ」の縁で雲散の意を「塵」に言いかけるか。

九三六四頁注三参照。「塵トアラバ…つもる…山となる」(『連珠合璧集』)。

一〇へよく見よ、と言うかと思うと、見る見るうちに。

扇かざし ナニゴト (・善悪・足引) ち捨てよ何事も よしあしびきの山姥が ヤマメグ 山廻りするぞ苦しき

〔詠〕 正面へ向きアシビ シテへ足引きの 地へ 山廻り 扇を開じ杖を持つ

【立回り】

〔正面へ向き ニ イチジユ カゲイチガ ナガ〕 シテへ一樹の蔭一河の流れ タシヨオ みなこれ他生の縁ぞかし エン まして

やわが名をいふづきの (言・ウタ月) ツレへ 四 向き 憂き世を廻る一節も メグ 狂言綺語の道直に キヨオケンキギヨ

讚仏乗の因ぞかし 真中へ出て ナゴリ 膝をつき杖を肩に凭せ あらおん名残惜しや

〔ノリ地〕 頭を下 五 イトマ シテへ暇申して 正へはずして立ち 帰る山の 常座で六杖を扇に持ちかえ 咲くかと待

ちし 右方を見やり シテへ花を尋ねて 地へ 山廻り 舞台を大きく回り 秋はさやけき カゲ 影を尋ね

て 見上げ シテへ月見る方にと カタ 山廻り 地へ 冬は冴え行く サ 時雨の雲 シグレ

の 空を見 七 シテ 雪を誘ひて サツ 山廻り 左方を見廻し メグ 舞台大きく回り メグ 大小前で小回り リンネ 輪廻を離れ

ぬ モオシウ 妄執の雲の (散・塵) ツル ちり積もつて 大きく存在を示し 山姥となれる キジヨ 鬼女がありさま

見るや見るやと ミネ 峰に翔り カケノリ込拍子 谷に響きて 飛び回り膝つき 今までここに 扇高く掲げて見上げ見下ろし あるよと

見えしが 立って大きく回り 山また山に 脇座辺から扇指して メグ 常座へ進み 山廻り 山また山に 山廻りして メグ 行方も

正面へ向き 脇正面を向いて留拍子 知らず なりにけり